



TITLE:

<批評・紹介> 田中豊藏著「美術思想」

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. <批評・紹介> 田中豊藏著「美術思想」. 東洋史研究 1937, 2(3): 271-272

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138730>

RIGHT:

美術思想

田 中 豊 藏 著

四十頁に滿たぬ短篇のうちによく支那繪畫論の大綱を盛り、それを歴史的に理解せしめるところにけだし本篇の特色があらう。著者は支那繪畫史の眞摯なる研究家であると共に支那文學の造詣深く、この點で東北大の青木正兒氏の畫論とともに深く傾聴に値する。まづ西洋畫勝つか、東洋畫勝つかの悲壯なる大決心の下に渡歐したことから、遂に東西各々その分あるを自覺するに至つたことを序説として述べ、最初に支那繪畫の勸戒主義、特に顧愷之の女史箴圖に至るまでの儒教的教化主義を説明しついでその形式的儒教主義からの解放によつて鑑賞畫の進出となり、從來の故事人物畫は歴史畫となり、別に山水畫、花鳥畫の誕生をうながし、おのづから自由な繪畫としての規範が論ぜられるに至り、こゝに畫論の萌芽を見ることになる。東晉顧愷之の「神氣骨法」「遷想妙得」に適確な解釋を下し、山水畫出現の思想的背景を描く。一に儒教の崇天思想、二に儒教の山川祭祀、三に道家の山水自然の愛、四に神仙説、五に隱逸者流の輩出

等である。そしてそれに並行した事實として敍景詩の發達を指摘し、謝靈運の「石壁精舍還湖中作」を引くあたり正に著者得意の壇上たるを覺える。さらに劉宋宗炳の山水論に一言し、南齊謝赫の六法論に至り、六法の意を闡明し、「氣韻生動」と「骨法用筆」の分立に注意し、唐末張彥遠の氣韻と形似の對立、立意と用筆の對應統一を説きもつてこれを北宗畫の地盤となし、北宋郭若虛の氣韻は對象にあるにあらず、作家の生死にありとする氣韻生死説を南宗畫、文人畫の素地と解する。かくて支那繪畫思想の大綱は終るわけであるが、水墨畫説南、北兩宗、詩畫一致、文人畫、畫院寫生、畫論等々に至つては著者の遺憾としながら言及されなかつたもので、著者と共にわれらも深く憾とするところで、これらのテーマに對する著者縱横の論述は近い將來に公表されん事を冀望してやまない。かゝる小篇のものに對していろいろの希望を述べることが結局無理であらうが、たゞ畫論發展の必然的な關係を明示してほしい、山水思想の思想的背景もつと緊密な聯絡の下に展開してほしいなどは本文に對する最小程度の希望といへるであらうか。たしかに著者の列舉した諸事項は山水思想の發達に關係をもつたであらう。

しかし、それがどうして、いかなるメカニズムの下に山水畫となつたか。以上の如き諸事項の存在した六朝ではなほ著者の認められるとほり（三二頁）山水畫は未發達であつた。山水畫はなほ萌芽的な存在に過ぎなかつた。そしてその後において著しい展開をとげてつひに東洋畫の大宗となつたのである。これは果していかなる地盤を得てかくまで發展したのであるか、こゝに山水畫の思想史的意味があるとともに、これを大宗とする東洋畫全體の根本的思想が横はつてゐる様に思ふ。本篇——美術思想——が繪畫思想に終り、繪畫思想が主として評畫家の論說に終つたのは或は必ずしも著者の責任ではあるまい。

（水野清一）